

# この真実はあなたを怖がらせるかもしれない！（2018-2019）

## 「善と悪の知識の木」とは何か？

Greatchain

2019/03/14

This Truth May Scare You (2018-2019) というユーチューブは、視聴者が2万5,000以上いて、すでに見た人があるかもしれない（翻訳あるかも）、あまり真剣に考えなかった者として、正直言って少し気後れするが、考えたことを述べてみたい。このビデオの話題は、聖書の創世記に出てくる2本の木の話だが、重点は「生命の木」の方にかかっている。この「生命の木」とは、各種多様な人間を創るときのDNAが、データベース化されて、現実存在している場所だという仮説が、今、相当有力になってきたという話である。（古代には各文明に共通の神話として存在した。）

だが、その前に不思議なのは、もう一本の「善と悪の知識の木」の方ではなからうか？ そもそも、なぜこの樹をそう呼ぶのだろうか？ この文字通り、人類始まって以来のナゾが、今、悪の正体が明かになるとともに、解けてきたのではなからうか？ 少なくとも、これはまだ、だれも、はっきり解答を出していないのではないだろうか。

このビデオには、デイヴィッド・ウィルコックもコーリー・グッドも登場するが、次に（きちんと正確に）引用する部分を語っているのは、『神々の指紋』の著者グレアム・ハンコックである：――

エデンの園に戻ろう。ここには重要な木がある。その一本は、アダムとエバがそこから取って食べる「善と悪の知識の木」The Tree of Knowledge of Good and Evilであり、それは彼らがある状態に陥り、彼らが代価を背負わねばならなくなる、選択の責任が自分にかかるかもしれない場所である。もう一つは「生命の木」Tree of Lifeであり、デミウルゴス（創造の神）がアダムとエバをエデンの園から追い出すときに、彼はその動機を述べる。その動機はある不気味なものだった：――これが決行されねばならないとしたら、彼らはエデンの園から追い出されねばならない。彼らは、善と悪の知識の木か

ら食べてしまったのだ。彼らは次には、「生命の木」から食べるだろう。そうすれば、彼らは我々のように神々になるだろう――。この言葉は実際に創世記にある。いったいここで何が起きているのか？ それはどういう意味か？ そこに深く埋め込まれたデミウルゴスの超越的な意味があって、そこに常に存在する力が、大昔から何かを我々に隠しているのか？ ある何らかの生命の木があるのか？ 我々が人間の寿命と考えているものの彼方に、何らかの、我々に提供されている永遠があるのだろうか？

取って食べるなど禁止されていたものは、性的な禁止、すなわち、おそらく姿を変えたレプティリアンと若い女性の間、性関係の禁止であろう。そのことは今、この終末の時代に、悪魔に捧げられる極限の悪として、ペドフィリアが異常にはびこっていることから、わかるであろう。

ではなぜ、禁止された行動のなされる場所を「善と悪の知識の木」と呼ぶのだろうか？（これは蛇が騙すためにそう呼んだのではなくて、神がそう呼んでいる。）その意味は「善悪の分別を知る木」と同じ意味に解釈されるが、もしそうだとしたら、そのような木の実は、奨励こそされるべきであって、禁止されるべきものではない。これは、いわゆる「禁断の実」の意味にはならない。何か禁止をする神の側に、口ごもるような、ごまかすようなところがある。

これが、ハンコックの指摘する不可解な、「生命の木」のナゾにつながっていく。神の厳しく禁じたことを犯したために、末代まで人間を罰するというのはわかるとしよう。しかしそれに対する神（々）の理由として、人間はその次には、きっと「生命の木」の実を食べるであろう、そうすれば彼らは、我々のような神々になるからだ、と聖書は言っている（とハンコックは言う）。普通に考えて、神々になることこそ、人間の目的のはずである。それを神々が許さないか、快く思わないのはなぜか？ もしかしたら嫉妬だろうか？ どうもそうではないように思える。ハンコックが言うように「何か我々に、大昔から隠されていることがあるのか？」

そのナゾを解く可能性をもつのが、「生命の樹」の実在を仮定することではないだろうか？ いよいよ「コズミック・ディスクロージャー」らしきものが始まって、我々のこの宇宙には、異次元に（互換可能的に）、恐ろしい風貌をもつ者もあり、身長もさまざまだが、基本的には同じ人間である者たちがあり、地球上の文明も、数百万年前に高度に発達したものがあつたらしい。そして、そういう者たちの多くが、DNAを交換して人間を改造するような技術をもっているらしい。コーリー・グッドは、「人間は一つであり、我々はすべて同じ根から来ている」と言っている。

もしこういうことが本当であり、世界中にある「生命の木」神話が一致して本当であり、人間の DNA のデータベースが、何らかの形で、どこかの次元（濃度）に実在していて、人間が自由につくられている、あるいはその実験がなされているとするなら、初めてこの地球に移民（？）した異星人が、地球人を、将来、自分たち神々の仲間に加えるべきかどうか、迷ったとしても当然であろう。エデンの園に閉じ込める（保護は美名）のも一案であったであろう。そのように考えると、「善と悪の知識」とは「善悪を知る」ことでなく、「善の勢力と悪の勢力が対立している宇宙の真実を知る」という意味ではではなかろうか？ 人間の罪とは、神に背いたことでなく、知り過ぎたことではないだろうか？

そこで、我々がエデンの園で、神の命令に背いて墮落したとき、それは、よかったのか悪かったのか、という矛盾した問題になる。神が、人間が墮落しないように忠告し、保護するのは、もちろん人間の幸福を願うからだが、それは文字通り、保護すること、温室で育てることであり、「箱入り娘」のように、世界の本当の（恐ろしい）姿を見せないようにするためであった。デイヴィド・ウィルコックは、明らかに、そのような幸福を選ぶことを拒否している。醜いものだろうと、恐ろしいものだろうと、世界の真実の姿を知ることが、人間の本来の使命、神に近づくことだ、と彼は考える。

その反対は、世界の真実を一切見ようとせず、新聞とテレビの言うことだけが、世界で起きているすべてだと信じている、現在の善良な人々である。彼らはいま行けば、そのまま幸福に一生を終えるかもしれない。しかし彼らは幸福だったのか、不幸だったのか、見解は分かれる。エデンの園で保護されるはずだった人間たちも、幸福だったのか、不幸だったのか？ しかし歴史にイフは無意味である。現実には、人間は「墮落した」ことによって苦しみ、苦しむことによって、今、「眼が開かれ」本当の自分を知る機会を得た。その機会を逃すか捕まえるかは、我々次第である。